

ヨーロッパ統合の歴史的起点とは

大月 康弘

(一橋大学大学院経済学研究科経済史・地域経済専攻教授)

1998～99年のことでした。ブリュッセルにEU博物館を、との話題が世界中に配信されました。これは楽しみだ、と思ったものですが、どうもそう簡単に企画は進捗したなかったようで、今日に至るまで、まだ開館の報に接していません。

欧州連合の歩みは、20世紀の政治と経済における偉大な実験として始まりました。しかしそこに、歴史的な根拠が前提されていたことも見逃してはなりません。EUは、ヨーロッパ世界の壮大な歴史を背景に、共通の政治的・文化的基盤の上に成立しているのです。

そう考えてよいとすれば、かかるヨーロッパ統合の歴史的起点とその根拠は、奈辺にあるとしたらよいのでしょうか。EU博物館の展示は、どの時代、どの出来事から始められるのか。ヨーロッパ史に親しむ私も、当時バりに研究滞在しながら、刮目して、その後の展開に期待したものでした。

報道では、ヨーロッパ統合の記念すべき起点は、西暦800年とのことでした。もちろんこれは、この年の12月25日に、フランク王カールが、都市ローマで、「ローマ皇帝」Imperator Romanorumとして戴冠された(とされる)ことを根拠としています。その日、ローマの聖ペテロ教会での典礼に足を運んだカールが、祈りの終わったところで、教皇レオ3世(在位795-816年)から皇帝の冠を置かれた。その故事に依っているのです。

「聖なるクリスマスの日、国王がミサのために、至福の使徒ペテロの墓前で祈りから立ち上がったとき、教皇レオは冠を彼の頭に戴せた。そして、彼はすべてのローマ人民により歓呼された(a cuncto Romanorum populo adclamatum est): 至聖なるカール、神により戴冠されたる偉大にして平和を許すローマ人の皇帝に命と勝利を！」と(Carolo Augusto, a Deo coronato magno et pacifico imperatori Romanorum, vita et victoria!)。そして、讃歌ののち、彼は教皇から古き皇帝の慣行に従った崇拜をうけ(ab apostolico more antiquorum principum adstratus est)、爾来、彼はパトリキウスの称号を止めて、皇帝と呼ばれた(imperator et Augustus est appellatus)」(『フランク編年誌』より)

EU統合を推進するフランスとドイツの指導者たちは、この故事こそが、統合ヨーロッパの起点である、と合意したようでした。それはそうです。両国とも、カールの王国、つまりフランク王国の東西分王国の後継にほかならないのですから。

ところが、です。この独仏を中心とした西ヨーロッパ諸国間での合意に、ギリシャの外交団が、敢然と異議を呈しました。何を言っているのか、ヨーロッパ統合はすでに4世紀、コンスタンティヌス大帝のときに成就しているではないか、と。

確かに、大帝コンスタンティヌス(在位306-337年)は、エジプト、シリアから、ブリタニアに至るまでのローマ帝国全土を統一し、これをキリスト教世界に転換させました。けだし、現代に至るEUの版図は、このキリスト教ローマ

帝国のそれと重なっています。そこには、その後歴史の舞台に登場するスラヴ諸族の世界も含まれていました。スラヴ諸国は当時まだ EU に未加盟でしたが、統合の方向性として含意されていたので、博物館論争は白熱したものになったようです。

ともあれ、大帝が心血を注いだ新都コンスタンティノーブルが、キリスト教世界の一大中心地として、都市ローマ以上の聖都となったことは確かなことでした。例えば、聖使徒教会 *Agioli Apostoloi*。アーヘンに造営されたカールの王宮付き聖堂や、ヴェネツィアのサン・マルコ聖堂の手本となったこの教会は、大帝コンスタンティヌスから、11世紀のコンスタンティヌス8世(在位 1025-28年)までが眠る歴代「ローマ皇帝」の墓所でした。大帝コンスタンティヌスは、ここに十二使徒の聖遺物(遺体)を集め、自らの石棺を並べさせた上、建物の屋根と外壁を黄金で覆わせた、といひます。それは、「世界」を束ねる聖都にふさわしい演出をしようというものでした。ちなみに、聖堂はオスマン帝国によって破壊され、跡地には *Fatih Camii*(征服者のモスク)が建てられて、メフメット2世の墓所があります。

EU 統合を考える場合、現在の利害得失があいまみえる交渉過程もさることながら、彼らの遠い歴史にも想いを馳せたいものです。そこにこそ、彼ら「ヨーロッパ人」のアイデンティティに関わるさまざまな出来事があり、精神的紐帯の形成も看取されるのです。

EU 統合の起点は、800年におけるカールの戴冠か、330年5月11日のコンスタンティノーブルの開都式か。今のところ、議論に決着はついていません。ただ、いずれの議論も、キリスト教ローマ帝国のヘゲモニーが問題となっている点では一致しています。カールによる「ローマ帝国復活」の物語が、今、かの地の学界で大きな論題として再燃してもいますから、しばらく、ビザンツ皇帝との交渉を含めた歴史分析の進捗を注視してみましょう。コンスタンティノーブルの皇帝からの承認抜きには、「ローマ皇帝」たりえなかったフランク王。その国際関係さながらに、現在の EU も慎重な議論の積み重ねの上にあるのだ、と承知するばかりです。